

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第34回／新興独逸建築工藝展覧會

Residence of Prince Asaka 1933—



○同日午前9時30分、朝香宮兩殿下御邸臨あらせられ重ねての光榮に浴した。貴賓室に於てマオレツチ独逸大使其他展覧會関係者の御挨拶をうけさせられた。委員より計表の経過と出品等に付豫め御説明申上げた後、會場を1時間餘に亘りとも御熱心に御覽遊ばされた。
○展覧會來觀者の数は詳かでないが、松坂屋係は會期10日間を通じて930,000名位と算してある。尙講演會への來臨者は4回を通じて約3,250名位である。

中央は朝香宮兩殿下

図1

朝香宮邸はフランスの建築様式の影響を受けた建物という印象があるかと思います。たしかに、朝香宮夫妻のール・デコ博覧會（パリ開催）見学が最大のきっかけとなったことは事実ですが、他にも幅広く建築に関する情報を集め取り入れていたことがわかってきました。

1932(昭和7)年5月に上野松坂屋で「新興独逸建築工藝展覧會」が開催されました。日独文化協會、建築学会が主催し、外務省、文部省、独逸大使館が後援し、第一次大戦後最も顕著な発達をみせたといわれるドイツの建築工芸を紹介しました。新興ドイツの建築及び関連材料、家具、工芸品その他あらゆる器具用品などが百貨店の2フロアーを使い展示されました。

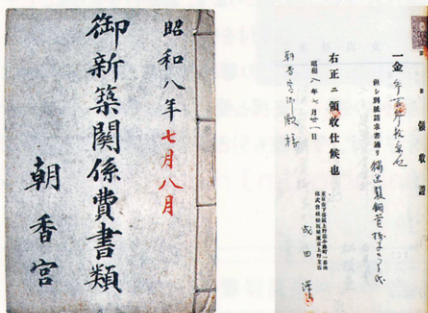


図2

日本で初めて開かれた外国の建築展覧會ということもあり、5月16日から29日の会期中、連日数万人の來場者を数えたということです。14日は開會式が開かれ、鳩山文相、フォレツチ独逸大使が祝辭を述べ、これに続き、ドイツに関する講演會も催されました。^{※1}

會期後半の26日に朝香宮兩殿下が宮内省技師権藤要吉を伴って來場し、約1時間にわたり

巡覽しました。朝香宮夫妻も権藤技師も滞歐経験がありその際ドイツを訪れています。同展開催は朝香宮邸竣工の1年前にあたり、ドイツの建築文化との再会を果たすとともに、新しい邸宅のための情報収集もかねていたようです(図1)。

朝香宮邸ウインターガーデンのマルセル・ブロイヤーの椅子セットは同展を機に松坂屋から購入したと考えられます(図2)。またスイスの壁紙メーカー、サルブラ社も同展に出品しています。サルブ



図3

ラ社のテッコーという製品は、朝香宮邸2階寢室・居間などの居住部分に使用されました。さらに独逸展を記録する写真帖には、宮邸2階北の間に設置されていた家具セットと同一と考えられるものが掲載されています(図3)。おそらくこのセットも独逸展で選ばれたと考えてよいでしょう。袖の部



図4

分が竹または籐製の涼しげな椅子は、夏の寛ぎの部屋であった北の間に相応しいデザインです(図4)。こうした事例からは、フランス趣味一辺倒と思われていた朝香宮邸も、当時盛んであった海外からの新種のデザインの流れを柔軟に採用していたことがわかります。(高波)

図1.「新興独逸建築工藝展覧會記録」(日本建築学会蔵)右から2番目朝香宮鳩彦殿下、允子妃殿下、一人おいて権藤要吉技師

図2.「朝香宮邸新築関係書類」(日本大学生産工学部図書館蔵)の中には松坂屋で「独逸製鋼管椅子セット」を購入した領収書が含まれ、これがマルセル・ブロイヤー作と思われる。

図3.「新興独逸建築工藝展覧會記念寫眞帖」(日本建築学会蔵)掲載 家具セット

図4.朝香宮邸北の間(昭和8年竣工当時)

*1. 14日は「独逸の建築」[独逸の美術工藝]と題して、それぞれ京都帝国大学教授武田五一と東京美術学校教授矢代幸雄が幻燈を映写し講演。講演會は16日、17日、21日も開かれ、東京帝国大学教授岸田日出刀、東京高等工藝学校講師蔵田周忠も登壇した。講演會は1日500人から1000人の聴衆を集め、人々の関心は非常に高かった。